

不安定な労働・不安な労働者——過渡期における雇用関係

Arne L. Kalleberg (2009) "Precarious Work, Insecure Workers: Employment Relations in Transition," *American Sociological Review*, 74: 1-22.

東京工業大学大学院 高久 聡司

あらゆる事象には「光」と「影」がある。われわれはその事象が滞りなく進行している場合には、その「影」を気に留めることなく生活し、それが公的に問題とされたときになって初めてそれに目を向ける。だが、そのように事象の「影」が公的問題となる際、その「影」の歴史性を忘却し、あたかも〈今・ここ〉で生じた事柄のように捉えてしまうことはないだろうか。公的問題は、「私的状況が、一つの全体としての歴史的社会的諸制度に組織されていること、そしてさまざまな状況が重なり合い、互いに浸透しあって、社会的歴史的な生活の巨大な構造をかたちづくる様式そのものに関連している」(Mills, 1959=1995:11)と、Millsは指摘した。さらに、そのような関連の追求が「社会学的想像力」をもっている、ということであるという。であるならば、われわれは直面した問題をそのインパクトの大きさや表面的な情報からではなく、それがどのような社会構造の中で生じたのかを通して理解することが重要なこととなるだろう。

今回紹介する論文の著者 Kalleberg は、これまで仕事の社会学、組織、職業と産業、労働市場、社会階層に関連する数多くの著作・論文を発表してきた (cf. Lincoln and Kalleberg, 1990; Kalleberg, 2001; Kalleberg and Marsden, 2005)。本論文は、アメリカ社会における「不安定さ」(precarious, insecurity)を鍵概念とし、「不安定な仕事」の増大がもたらす帰結とそこから生じた社会学の課題を論じている。Kalleberg は、「不安定な仕事」(precarious work)を「労働者の観点から見た、不確定な、予測不可能な、リスクを抱えた雇用」と定義する。その上で「不安定な仕事」は現代の新しい問題ではなく、有給雇用の確立以来の「問題」であり続けていたにもかかわらず、1970年代以降になって、ようやく重要な関心事として結晶化したと指摘する。換言すれば、「不安定な仕事」が社会問題化することによって、われわれはそれが重大な関心事であると認識するが、それは常に「問

題」としてはあり続けていたのである。それゆえに Kalleberg は、1970年代以降のアメリカ社会の構造的変容に目を向け、「不安定な仕事」が増大した要因を探り、社会学に課せられた課題を指摘する。本論文の面白みは、データの解釈や分析の新鮮さではなく、「不安定な仕事」を取り巻く社会構造を通して、それを論証していくやり方に Mills が指摘したような「社会学的想像力」を読み取れる点にある。

Kalleberg は、アメリカにおいて「不安定な仕事」が増大したのはマクロ経済的变化に伴う新自由主義的なグローバリゼーションが生じた1970年代半ば以降であるという。言うまでもなく、それは市場に対する社会的な防衛を基盤にした「安全」ではなく、市場を中心に据えた「流動性」を基盤とする社会である。その間、労働市場は空間的な再編成を遂げ、ホワイトカラーの増大、企業戦略としてのレイオフの拡大、イデオロギーの衰退とともに「不確実性」は経済セクター全体にわたるようになったことが、現代社会における「不安定な仕事」の特徴であるという。Kalleberg は、その証拠に「雇用者への結びつきの低下」「長期失業の増加」「職業不安認知の増大」「非典型雇用と偶発的な仕事の増大」「雇用者から被雇用者へのリスク転換の増加」といった社会構造および社会意識の変化をあげる。これらの証拠をもとに Kalleberg は、その帰結として、仕事に関する経済的不平等・不安・不安定性の拡大、ならびに仕事以外の領域におけるそれを指摘する。その領域の一つは家庭領域であり、共働きの増加および不確実性の影響を受けて晩婚化や少子化をもたらす。もう一つはコミュニティであり、社会参加の低下および地域に根を置く新参者の低下といった社会構造にかかわる問題を生じさせる。これらは不確実性の増大によって経済活動に重きを置かざるを得なくなった弊害としての社会生活上の帰結である。

Kalleberg は、労働者の「不安」を彼らの行為からではなく、社会構造上の変化に現代社会における「不

安定な仕事」を関連づけて論を進める。その作業を通して Kalleberg は、現代社会の問題を指摘するだけでなく、この現象の説明を試みる社会学者、その特徴と帰結に取り組むための効果的な政策を組み立てようとする社会学者にとっての課題を見出す。曰く、その課題は、いかにして雇用者と労働者との間の雇用関係が形成され、どのように維持されているのか、どのような仕組みが公共政策と調和するのかを説明することである。この課題に応えるために、現代の仕事、労働者、職場のリアリティを理解するために用いていた理論的・分析的道具を再構築する必要があるという。それは、現代における「不安定な仕事」や雇用関係は、固定的なものではなく社会の構造的変化——「流動性」と「安全」との二重運動——の上に常に置かれているからである。そして Kalleberg は、次のように論を締めている。仕事の研究への全体的・学際的な社会科学のアプローチは、来るべき時代においてわれわれの社会が直面する重要な問題——仕事領域のみではなく、個人・家族・コミュニティといった仕事以外の領域の問題——に立ち向かう可能性を有している、と。

本論文はアメリカ社会という文脈で語られているが、

「流動性」を基盤とした社会の帰結として生じた雇用問題、社会問題は現代の日本社会にも深く通底するところがあるだろう。本論文は、そのような現代的な問題に取り組む際の研究者の態度や心構えを考え直させる論文であるように思われる。

参考文献

- Kalleberg, A. L. (2001) "Organizing Flexibility: The Flexible Firm in a New Century," *British Journal of Industrial Relations*, 39: 479-504.
- Kalleberg, A. L. and P. V. Marsden (2005) "Externalizing Organizational Activities: Where and How U. S. Establishments Use Employment Intermediaries," *Socio-Economic Review* 3: 389-416.
- Lincoln, J. R. and A. L. Kalleberg (1990) *Culture, Control and Commitment*, Cambridge University Press.
- Mills, C. W. (1959) *The Sociological Imagination*, Oxford University Press. (=1995, 鈴木広訳『社会学的想像力〔新装版〕』紀伊国屋書店.)

たかく・さとし 東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻博士課程。最近の主な著作に「死者についての語りにおける沈黙のリアリティ」『ソシオロジ』53(2), pp. 107-123。社会学専攻。